

主 題：選ばれなかった選民2

聖書箇所：ローマ人への手紙 11章2-6節

主なる神に逆らい続け、終には、主イエス・キリストを十字架にまで追いやった選民イスラエル。彼らの罪を見ると、神がこのイスラエルの民、ご自分の民を見捨ててしまわれたのかと、そのような疑問が浮かんできます。彼らはこれ程神に対して罪を犯して来た、神はもう彼らをお見捨てになったのか？と、そのような疑問に対してパウロは「そのようなことは絶対にありません。」と最も強い否定のことばを用いて答えました。「そんなことは絶対にない」と。それはパウロには「神は彼らを絶対に退けられない。彼らは今も神の民である。」というその確信があったからです。そして、パウロはその確信の根拠について1節のところから記していました。私たちはその三つの中の二つを見て来ました。

☆パウロの確信の根拠

神がまだイスラエルを見捨てておられないその根拠、

A. 彼自身が救われたこと 1節

イスラエル人であるパウロ自身の救いです。「神が私を救ってくださった。ユダヤ人、イスラエル人である私を神が救ってくださった。」、それが神がまだイスラエルを見捨てておられない根拠だと最初に教えました。

B. 彼らは主の選民である 2a節

二つ目の根拠は、彼らは「主の選民である」とパウロは言います。「あらかじめ知っておられたご自分の民」とパウロは記しました。神が彼らを選んだのです。彼らは神によって選ばれた存在だと言います。つまり、彼らは神によって特別に愛され、前もって、ある大切な働きに召された者たちだ、だから、神が彼らを退けるはずはない、決して、見捨てることはないということを教えるのです。そして、この主なる神は必ず約束を守られる、この方が言われたことは必ずそのようになると、それがパウロの信仰でした。ですから、神の約束はたとえ今がどうしても必ず成就すると、そのような確信を持っていたのです。私たちがその確信を持つべきだということを前回見た訳です。私たちの信仰の土台も神のみことばです。「神がこう言われた。だから、私たちはそれを信じます。」と。

C. 選ばれた選民がいること 2b-6節

パウロは三つ目の根拠を2節の後半から6節に上げています。

1. エリヤの神に対する訴え 2b-3節

2-3節「あらかじめ知っておられたご自分の民を退けられてしまわれたのではありません。それともあなたがたは、聖書がエリヤに関する個所で言っていることを、知らないのですか。彼はイスラエルを神に訴えてこう言いました。：3主よ。彼らはあなたの預言者たちを殺し、あなたの祭壇をこわし、私だけが残されました。彼らはいま私のいのちを取ろうとしています。」、まず、ここにはイスラエルの預言者であったエリヤの神に対する訴えが記されています。2節にはエリヤが神に訴えたことと記されています。なぜ、訴えたのですか？それはイスラエルが罪に罪を重ねていたからです。神に対して罪を犯していたゆえに、預言者エリヤは「なぜ、神はこのような罪をお赦しになるのですか？なぜ、神はこのような罪を放っておかれるのですか？」と思いました。そして、彼は神の前に「神様、彼らに対して何かの行動を起こしてください。」とそのようなことを申し出るのでした。

3節のみことばは、旧約聖書列王記第一19章の10節と14節からの引用です。10節「エリヤは答えた。「私は万軍の神、主に、熱心に仕えました。しかし、イスラエルの人々はあなたの契約を捨て、あなたの祭壇をこわし、あなたの預言者たちを剣で殺しました。ただ私だけが残りましたが、彼らは私のいのちを取ろうとねらっています。」、14節「エリヤは答えた。「私は万軍の神、主に、熱心に仕えました。しかし、イスラエルの人々はあなたの契約を捨て、あなたの祭壇をこわし、あなたの預言者たちを剣で殺しました。ただ私だけが残りましたが、彼らは私のいのちを取ろうとねらっています。」

私たちはこのみことばを理解するために、その背景を少し思い出しingすることが必要です。この預言者エリヤは非常に勇敢な人物でした。I列王記18章にはその勇敢さが記されています。皆さんがよくご存じの箇所です。彼はイスラエルの北に位置するカルメル山という山の上で、バアルとアシェラに仕える預言者たち850人との戦いをするのです。どちらの神が本当の神なのか？お互いに祭壇を作ってその上にいけにえを載せて、そして、天から火をもって答えてくださる神、私たちの祈りに答えてくださる神、それこそが本当の神だ。だから、どちらの神が本当か、それを今はっきりさせようというわけです。バアル神を崇拝する預言者450人とアシェラに仕える預言者400人が、自分たちの神に祈り

をささげ続けるのです。叫んでも叫んでも答えがありません。ちょうど、昼頃、エリヤは彼らを嘲ってこのように言います。「もっと大きな声で呼んでみよ。彼は神なのだから。きっと何かに没頭しているか、席をはずしているか、旅に出ているのだろう。もしかすると、寝ているのかもしれないから、起こしたらよからう。」（18：27）と。そうすると「彼らはますます大きな声で呼ばわり、彼らのならわしに従って、剣や槍で血を流すまで自分たちの身を傷つけた。」（18：28）と、彼らは必死になってバアルに祈りをささげるのです。しかし、時間が経過しても何も起こりません。エリヤは今度は私の番と、18：30「エリヤが民全体に、「私のそばに近寄りなさい。」と言ったので、民はみな彼に近寄った。それから、彼はこわれていた主の祭壇を建て直した。」、このように祭壇を築いて、その上にたきぎを並べて一頭の雄牛を切り裂いてその上に載せ、そして、四つの甕に水を満たして、この全焼のいけにえにその水を注げと命じました。一回だけでなく、三回そのようにさせました。いけにえもたきぎも周りの溝も水で溢れました。そして、18：36-37「アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ。あなたがイスラエルにおいて神であり、私があなたのしもべであり、あなたのみことばによって私がこれらのすべての事を行なったということが、きょう、明らかになりますように。：37 私に答えてください。主よ。私に答えてください。この民が、あなたこそ、主よ、神であり、あなたが彼らの心を翻してくださることを知るようになしてください。」とエリヤが祈ると、38-39節「すると、主の火が降って来て、全焼のいけにえと、たきぎと、石と、ちりとを焼き尽くし、みぞの水もなめ尽くしてしまいました。：39 民はみな、これを見て、ひれ伏し、「主こそ神です。主こそ神です。」と言った。」と、このように記されています。エリヤは大変なことを経験したのです。

彼は信じていました。自分の神が真の神であることを。そして、今この場であって、神は天からその祈りに答えて、火をもっていけにえを祭壇を焼き尽くしたのです。彼らの心は非常な喜び、感動に満ち溢れたことでしょう。この状況を見たのですから。その後、エリヤはこれらすべての預言者を捕らえて殺すのです。そして、その後すぐに何が起こったのか？この出来事を聞かされたアハブ王の王妃イゼベルが、自らの使いに託してこのようなことばをエリヤに送るのです。「もしも私が、あすの今ごろまでに、あなたのいのちをあの人たちのひとりのいのちのようにしなかったなら、神々がこの私を幾重にも罰せられるように。」（19：2）、明日のこの時間までにあなたを殺す」というメッセージです。今、大きな勝利を収めたエリヤはこれを聞いて南の方へと下って行くのです。ベエル・シェバへ下り、後に、ホレブ山へと、シナイ半島のほとんど南まで、彼は旅をするのです。「四十日四十夜」旅をしたと聖書は教えます。

なぜ、そのようなことをしたのでしょうか？それは恐ろしくなったからです。ホレブ山に着いたときに、エリヤはある洞穴を見つけてそこに入って眠るために休息を取りました。その所であって、主がエリヤに対してこのように尋ねるのです。I列王19：9「エリヤよ。ここで何をしているのか。」、そのとき、エリヤはこのように答えました。10節「私は万軍の神、主に、熱心に仕えました。しかし、イスラエルの人々はあなたの契約を捨て、あなたの祭壇をこわし、あなたの預言者たちを剣で殺しました。ただ私だけが残りましたが、彼らは私のいのちを取ろうとねらっています。」、私たちが今、このローマ書11：3で見ているみことばです。このエリヤのことばを見ると、イスラエルがどれ程霊的に墮落していたのかが分かります。彼は三つのことを上げています。

◎北イスラエルの霊的墮落

(1) 主の契約を捨てた

神のみことば、神の教え、神の契約、すべてのことを彼らは無視したのです。

(2) 主の祭壇を壊した

ですから、カルメル山の上でエリヤがいけにえをささげるために、祭壇をもう一度建て直すのです。先ほど説明したI列王記18：30にそのことが記されています。「エリヤが民全体に、「私のそばに近寄りなさい。」と言ったので、民はみな彼に近寄った。それから、彼はこわれていた主の祭壇を建て直した。」、イスラエルの民はこのように主の祭壇を壊しただけではなく、偶像の祭壇を築いていたのです。本来なら、祭壇は一つです。エルサレムの祭壇だけです。ところが、北王国イスラエル、南王国ユダと分かれていて、北王国の人々はエルサレムまでなかなか礼拝に行くことが出来なかったため、彼らは様々な所に祭壇を作ったのです。しかし、悲しいことに、今も話したように、彼らは偶像の祭壇をも築いていたのです。

ギデオンという一人の人物を皆さんもご存じかと思います。士師記6章に出て来る記事ですが、彼はこのようなことを経験しています。主の使いが彼の所に来ます。ギデオンは彼のために料理を備えるのです。そして、料理を整え終わった後、彼の所に持って行くのですが、主の使いはこのように言います。20-23節「すると、神の使いはギデオンに言った。「肉と種を入れないパンを取って、この岩の上に置き、その吸い物を注げ。」それで彼はそのようにした。：21 すると主の使いは、その手にしていた杖の先を伸ばして、肉と種を入れないパンに触れた。すると、たちまち火が岩から燃え上がって、肉と種を入れないパンを焼き尽くしてしまいました。主の使いは去って見えなくなった。：22 これで、この方が主の使いであったことがわかった。そ

れで、ギデオンは言った。「ああ、神、主よ。私は面と向かって主の使いを見てしまいました。」：23 すると、主はギデオンに仰せられた。「安心しなさい。恐れるな。あなたは死なない。」、そして、24 節から「そこで、ギデオンはそこに主のために祭壇を築いて、これをアドナイ・シャロムと名づけた。これは今日まで、アビエゼル人のオフラに残っている。：25 その夜、主はギデオンに仰せられた。「あなたの父の雄牛、七歳の第二の雄牛を取り、あなたの父が持っているバアルの祭壇を取りこわし、そのそばのアシェラ像を切り倒せ。：26 そのとりでの頂上に、あなたの神、主のために石を積んで祭壇を築け。あの第二の雄牛を取り、切り倒したアシェラ像の木で全焼のいけにえをささげよ。」、このようにイスラエルの地に偶像崇拜が入り込んでいたのです。

先ほど見たように、この北王国イスラエルの王であったアハブの王妃イゼベルは、850人もの偶像に仕える預言者たちを困っていたのです。というのは、イゼベルはバアルを信奉し、その預言者たちを丁重に扱っていたのです。だから、その人たちが殺されたということを聞いたときに、当然、このイゼベルは怒りに満ち溢れたのです。ですから、少なくとも、私たちがこの記事から分かることは、当時のイスラエルの霊的な状態です。それは大変な状態にあったということです。偶像崇拜が横行し、主の祭壇が壊されて偶像の祭壇が築かれ、偶像にいけにえがささげられるというような状態でした。

(3) 主の預言者たちを殺した

多くの預言者が殺されました。これはこの時代だけのことではありません。どの時代でも、イスラエルは神からのメッセンジャーを殺しました。そのことは、イエスによって、また、あのステパノの証を通して教えられています。主イエス・キリストはこんなことを言われました。マタイ23：37「ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者。わたしは、めんどりがひなを翼の下に集めるように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。」、また、ステパノが石打ちで殺されるその前に、イスラエルの人々と話をしているときに彼はこのように言っています。使徒の働き7：52「あなたがたの先祖が迫害しなかった預言者がだれかあったでしょうか。彼らは、正しい方が来られることを前もって宣べた人たちを殺したが、今はあなたがたが、この正しい方を裏切る者、殺す者となりました。」

ですから、これを見ても、エリヤが言ったようにイスラエルは大変な状態にあったのです。神に逆らい続け、偶像を崇拜し、神のメッセージに耳を傾けることをしなかったばかりか、神のメッセージを伝える者たちを捕まえては殺していたのです。ですから、エリヤが言ったように、多くの預言者たちが殺されていたのです。もちろん、すべての預言者が殺された訳ではありません。そして、イゼベルの「あなたを殺す」というメッセージを聞いたときに、エリヤは恐れをなして逃げたのです。

さて、この主とエリヤとのやりとり、この出来事は、実は、私たちにとっても大切なレッスンを教えてくれます。神のエリヤに対する答えを見る前に、しばらく、そのことをごいっしょに見ておきたいと思います。

◎エリヤから私たちへのレッスン

先ほどから話しているように、エリヤはなぜシナイ山の南の果て、ホレブ山まで行ったのでしょうか？理由は一つです。エリヤは恐れたのです。そして、身の危険を感じて彼は逃げ出したのです。そして、ホレブ山の洞窟にいたときに、主がエリヤに語られたのです。主が「エリヤよ。ここで何をしていますのか。」とエリヤに問われたときに、主なる神が為さったことは、エリヤに自分自身を吟味する機会を与えたのです。この場であって、主はエリヤが自分がしていることに正しく目を向けるようにと、その様に働いたのです。というのは、エリヤがしたことは失敗だったからです。間違ったことをしたのです。そのことを悟らせようとするのですが、エリヤの反応を見ると、彼はまだそのことに気付いていません。

エリヤの失敗

エリヤがこのような失敗を犯した原因は二つあります。非常に大切なことです。

(1) 自らの恐れ

私たちが見て来たように、彼は恐れをもっていました。そして、恐れを抱いたときに何が起こるのでしょうか？主に対する信頼を失うのです。その結果、彼は自分で考えて行動を取るのです。逃げなければいけないと。先ほど、I列王記18章で見たように、エリヤは神の奇蹟を見ました。祈りに答えて、天から火をもって祭壇を焼き尽くした神のそのみわざを見たのです。それなのに「あなたのいのちを明日までに奪う」というメッセージを聞いたときに、彼は恐ろしくなって逃げ出してしまふのです。それまでは神に信頼し、神のみわざを見たエリヤですが、明日までに殺されるというメッセージを聞いたときに、同じ信頼を保つことができませんでした。

なぜでしょう？恐れたからです。自分のいのちが狙われていることが分かると、彼は主を信頼して正しい選択をすることが出来なかったのです。皆さんもそのような恐れがありませんか？これはエリヤだけの問題ではありません。私たちがみな経験することです。私たちが何かいろいろなことで恐れを感じてしまうと、悲しいことに、神の方に向かないで、何とか自分で問題を解決しようとし、何とか自

分で解決しよう！となってしまう。エリヤのように、大きな問題から逃げていませんか？これまで神を信頼して神の最善が成されることを信じて、みことばに立って歩いて来たのに、突然、大きな問題が自分に襲ってきたときに「大変だ、どうしたらいいか…逃げ出さなければいけない！」と、神を忘れて、自らの判断でもって間違っただけの選択をしてしまう、そのようなことはありませんか？私たちはだれ一人としてエリヤの失敗を責めることはできないのです。私たちは同じようなことをしているからです。いつも私たちの中には大小の恐れがあります。でも、それが私たちをコントロールし始めると、私たちは失敗を犯してしまいます。もし、今恐れを抱いている人がいるなら、もう一度神を見上げることで、それは天からの火をもって祈りに答えてくださる神です。

(2) 自らのプライド

このエリヤの問題はプライドだったのです。先ほど、私たちが見て来たように、神の「ここで何をしているのか」という問いかけに対して、エリヤが答えたその内容をもう一度見てください。19：10「私は万軍の神、主に、熱心に仕えました。しかし、イスラエルの人々はあなたの契約を捨て、あなたの祭壇をこわし、あなたの預言者たちを剣で殺しました。ただ私だけが残りましたが、彼らは私のいのちを取ろうとねらっています。」、エリヤはこのとき、間違いなく自己憐憫に陥っています。自分で自分をかわいそうだと思っているのです。なぜ、エリヤは最初に「私は万軍の神、主に、熱心に仕えました。」などと言ったのでしょうか。「いのちを狙われて恐ろしいのです」とは言わなかったのです。私は主に熱心に仕えて来た、つまり、彼の中では、こうして一生懸命あなたに仕えて来たにも関わらず、なぜ、こんなことが私に起こっているのか？と、その疑問を持っていたからです。これだけ神に忠実に生きて来た、これだけ神のためにして来た、もっとすばらしいことが私の生活に起こってもおかしくない。それなのに、私が耳にしたことは「明日のこの時間までにあなたのいのちを奪う」ということだ！と。

恐らく、エリヤのこの態度を見る限り、彼は自分をもっとすばらしいものをいただいて当然だというプライドを持っていたことが分かります。これだけ熱心に生きて来たのだから、これだけ神に仕えたのだから、すばらしいものをいただいて当然でしょうと、非常なプライドです。私たちも気をつけなければいけません。私たちが受けるのに相応しいものは、神からのさばきでしかありません。私たちがいただいているものはすべて神からの恵みです。神に対して高慢になっていませんか？「神さま、なぜ、このようなことを…？」と。

私たちは少なくとも、このように二つのことを見ることが出来ます。その結果、悲しいことに、エリヤは神のみこころに反して、その問題から逃避するという選択をしたのです。

エリヤのすばらしいところ

・主の命令に従う

ところが、このエリヤはすばらしい人物でした。確かに、私たちと同じように弱さをもった人でした。でも、この後すごいことが起こるのです。神がエリヤと話をしているうちに、神がエリヤにある命令を与えるのです。その命令はI列王21：17-18「:17 そのとき、ティシュベ人エリヤに次のような主のことばがあった。:18 「さあ、サマリヤにいるイスラエルの王アハブに会いに下って行け。今、彼はナボテのぶどう畑を取り上げようと、そこに下って来ている。」、今、エリヤが恐れて逃げたアハブのところに帰りなさいと言うのです。どうですか、皆さん？私たちは「神さま、それだけはお断りを…、そこに戻ったら殺されるかもしれません！」と言うでしょう。しかし、神はエリヤにさらにこのように言われます。19節「彼にこう言え。『主はこう仰せられる。あなたはよくも人殺しをして、取り上げたものだ。』また、彼に言え。『主はこう仰せられる。犬どもがナボテの血をなめたその場所で、その犬どもがまた、あなたの血をなめる。』」と、アハブのところに行くだけでも大変なのに、勇気がいるのに…、アハブにこんなことを告げるなんて、彼はどれ程怒るでしょう！と。エリヤがこのように非常な恐れを抱くのも当然な状況です。「行きたくない。行ったら殺される。しかも、こんなことを言うならますます火に油を注いでしまう。」と。エリヤはどうしたでしょう？「神さま、ごめんなさい。これだけは出来ません。」と言ったのでしょうか？

いいえ！エリヤはアハブのところへ行くのです。エリヤは神のみこころに従ってアハブの所に戻って行くのです。彼は従順に神に従ったのです。失敗はしました。でも、その失敗を悔い改めて神に従い続けたのです。ですから、「神の人」と呼ばれたのです。一番恐ろしい所、最も近寄りたくない所、しかも、その王の所に行って「あなたに災いがくだる」というメッセージを語らなければならない。しかし、彼は喜んで従うのです。神を信頼したからです。「あなたを殺す」という恐ろしいメッセージを聞いたときにエリヤは恐れしました。そして、みこころに反してしまいました。しかし、神は彼をねんごろに扱われたのです。「エリヤ、ここで何をしているのか」、神とのやりとりの中でエリヤは自分の過ちに気付

いて、そして、私にとって最善のことは「神を信頼して神に従うこと」、結果がどうであれ、私の責任は神のみこころに従い続けて行くことだと、そして、エリヤはそこに帰って行くのです。

・どんなときにも恐れず、主を信頼すること

信仰者の皆さん、もしかすると、あなたも今そんな状況にいらっしゃるかもしれません。大きな恐れがあってその問題から出来るだけ遠くに離れよう、その問題を見ないように逃避しようとしているかもしれません。でも、そこには解決がありません。あなたが神の祝福をいただきながら、神の栄光を現わして行くためには、あなたが神を信頼して神に従い続けて行くことです。確かに、私たちには分からないことが山ほどあります。でも、それは私たちが分からないだけで、父なる神はすべてのことを分かっておられます。その方に任せて生きることが出来るのです。そして、その方はたとえ私たちが死んでも生きることが出来る、私たちをよみがえらせることのできる、全能の神です。天から火をもって答えることの出来る神です。エリヤは再びその信仰に立ち返るのです。ですから、もし、あなたが今神に目を向けていないとするなら、もう一度主をしっかりと見上げることです。周りのいろいろな出来事によって心を騒がせてはいけません。しっかりと主を見て主の約束に立つことです。

2. 主の答え 4節

さて、今日のレッスンにもう一度戻って、11章4節のところから、そのエリヤの答えに対する神からの応答が記されています。「ところが彼に対して何とお答えになりましたか。「バアルにひざをかがめていない男子七千人が、わたしのために残してある。」と、このようにお答えになった神、これは神のお告げです。神がこのようなメッセージをエリヤに与えたのです。これも1列王記19：18からの引用です。先ほどから出て来る「バアル」とはどのような神でしょうか？これは「嵐の神」と言われました。バアルは雨、霧、露を支配する農耕の神として、イスラエルの今もその場所にあるカナン人の地のカナン人に信じられていた神です。農耕を司っている神です。神の答えは「バアルにひざをかがめていない男子七千人が、わたしのために残してある。」です。

(1) バアルにひざをかがめていない男子七千人

神学学者のレオン・モーリス博士は、この「ひざをかがめていない」という行為の意味をこのように説明します。「これは服従を象徴している。その人物を霊的な主人として認めているということ。」と。ですから、そのようにしていない人たちが七千人いると言うのです。このバアルという偽りの神に服従することなく、この神を自分の霊的な主人として認めていない人が七千人いると、その様に主は答えるのです。

(2) わたしのために残してある

a) 神によって残された者がいる

この「残してある」ということばは言い方を変えると、「神のために取ってある」です。しかも「わたしのために」と、神ご自身が言われています。つまり、神が言われることは「わたし自身のもので、わたしが所有するものとして特別に取ってある存在がある。」ということです。このすべての行為は神ご自身の一方的な行為です。神ご自身がそのことを選択なさったのです。皆さん、このような答えを神がお与えになったのです。

b) どの時代でもそうであった

そして、そのことは歴史を見る時に証明出来ます。どの時代でも、イスラエルが神に逆らっている時代でも、神は神を愛する者たちを選んでおられます。旧約の時代を幾つか見ましたが、新約を見ると、

- ・ **イエスの誕生のとき**：シメオンという人物がいました。彼は神からあるメッセージをもらっていました。それは「主のキリストを見るまでは、決して死なない」（ルカ2：26）というお告げでした。そして、幼子イエスをシメオンが抱いたときに、まだ、何の働きもしていないその幼子を抱いたときに、彼はこのように言います。「私の目があなたの御救いを見たからです。」（2：30）。このように神によって選ばれた人物がいたのです。そして、このシメオンとともにいた預言者アンナもそうでした。彼らは確かに神によって選ばれたのです。（ルカ2：25-38）
- ・ **ペンテコステの出来事**：イエスが天にお帰りになった後、エルサレムにいた人々の上に聖霊が下るといふ出来事ですが、聖書を見ると、使徒2：41に「そこで、彼のことばを受け入れた者は、バプテスマを受けた。その日、三千人ほどが弟子に加えられた。」とあります。大半の人たちがユダヤ人です。神は彼らを選んでおられたのです。その後、ペテロとヨハネのメッセージによって救われた人の数が記されています。
- ・ **ペテロとヨハネのメッセージ**で：男だけで五千人いたのです。使徒4：4「しかし、みことばを聞いた人々がたゞい信じ、男の数が五千人ほどになった。」、その多くがユダヤ人です。

ですから、こうして神のなさったみわざを見る時に、確かに、イスラエルは神に対して心を閉ざしています。神に逆らっています。しかし、神はご自分の選ばれた人々をちゃんと置いておられるのです。そして、この人々がこのすばらしい救いへと導かれているのです。

パウロが言ったように「神はイスラエルに対してすばらしい計画を持っておられる。そして、神はその計画を、その約束を必ず守られる。」と。

3. パウロの結論 5-6節

この神のお答えを踏まえて、パウロは5-6節で結論を述べています。「それと同じように、今も、恵みの選びによって残された者がいます。：6 もし恵みによるのであれば、もはや行ないによるものではありません。もしそうでなかったら、恵みが恵みでなくなります。」

(1) 神の恵みは今も働いている 5 a 節

5節「それと同じように、今も、」と記されていますし、最後の動詞を見てください。「います」とこれも現在形で書かれています。ですから、この約束は今も継続している、神は今でも、ご自分がある人々を選んでいられると言うのです。ですから、皆さんよくご存じのように、確かに、イスラエルという国はイエス・キリストを救世主と認めることなく、まだ救世主を待っています。でも、イエスを信じるユダヤ人が起こされています。私たちがイスラエル旅行をしたときにアレンジしたことは、イスラエルに住むユダヤ人でクリスチャンの人に来てもらって、何度かその証を聞かせてもらったことです。確かに、神は彼らのうちに働いておられます。ユダヤ人を救いへと導いておられます。

これから、私たちの学びはこの11章を進んで行きますが、それに連れて、今、私たちはニュースで中東のいろいろな出来事を聞いています。これからどうやって行くのか…？しかし、聖書が私たちにそのことを教えてくれています。いったいどのようになって行くのか？神がどのようにあのイスラエルを守って行かれるのか？今、私たちは聖書が教えていることを、実際にテレビを通してマスコミを通して知ることが出来ます。私たちはすごい時代に生きているのです。でも、確かに言えること、それは神の約束は必ず成る、神は彼らを選ばれたということです。そして、そういう選びの器は今もいるということです。ですから、この恵みは「今も働いている」とパウロは言うのです。

(2) 神の恵みは今も変わらない 5 b-6節

5 b 節「恵みの選びによって残された者がいます。」、つまり、パウロは、この救いという恵みに与るのは、神の一方的な恵みによる、そして、それ以外の方法は存在しないということを明らかにします。行ないによるのではないと言うのです。Ⅱテモテ1：9でパウロは「神は私たちが救い、また、聖なる招きをもって召してくださいましたが、それは私たちの働きによるのではなく、ご自身の計画と恵みとによるのです。この恵みは、キリスト・イエスにおいて、私たちに永遠の昔に与えられたものであって、」と言っています。今、私たちが見ていることがそのままここに記されています。「神は私たちが救い、また、聖なる招きをもって召してくださいました…」と、これは救いのことです。この救いは私たちの働きによるのではない。どのような行ないによってもこの救いにこの恵みに与ることはないと言うのです。

では、どうすれば与ることができるのでしょうか？神ご自身の計画とご自身の恵みによってこの救いへと招かれるのです。そのことをパウロは私たちにここで教えてくれているのです。「恵みの選び」によって残された、神が一方的に皆さんに働いて、一方的に皆さんをこの救いへと導いてくれたというのです。あなたの行ないではないのです。「神の恵みの選び」ゆえなのです。あなたが善人だから神があなたを選んだのではないのです。あなたが人格者だから神があなたを選んだのではないのです。あなたが愛されている人だから、神はあなたを選んだのではない。あなたが社会に貢献しているから選ばれたのでもないのです。あなたの信仰心が篤かったから神があなたを選んだのでもないのです。あなたが神に対して熱心だったから、あなたを選んだのでもないのです。あなたが神に対して献身的だったから、神があなたを選んだのでもないのです。すべて神の一方的なわざなのです。神が一方的にあなたを選んでくださり、そして、あなたの上にこの祝福を与えてくれたのです。あなたの功績ではない、あなたの働きではありません。もし、私たちの何かのわざによってこの救いに与ったとするなら、それはもうその時点で「恵み」ではなくなります。それは「行ないによって」となります。しかし、パウロが言うことは、あなたも私も行ないでなく、神の一方的なご厚意によってこの救いに与った、私たちは恵みによってこの救いに招き入れられたのです。

この「選び」というすばらしい教理、パウロは再び、私たちにそのことを教えてくれるのですが、私たちがそのことを考える時に、最後に、三つのことを皆さんに提案したいと思います。

《結論》

選ばれた者として何をすべきか？

1. 感謝すること：

選ばれた皆さん、神に感謝することです。なぜ、私のような者を神は選んでくださったのか、私には分かりません。しかし、分かっていることは、イエスを信じているあなたを、神は世界を造る前からキリストのうちに選んでくださったということです。神が一方的にあなたに働いて、あなたを罪から救い出してくださったのです。それが決まったのは、まだ、あなたがこの地上に生まれる前からであり、この地球が出来る前からであり、この世が始まる前からです。神はその様にあなたを選んでおられたのです。覚えておられますか？イエスが七十人を送られたときに、七十人は喜びを持って帰って来ました。イエスの名によって悪霊を追い出したことを彼らは喜んでいました。でも、イエスが言われたことは、そのことを喜ぶよりも、「ただあなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい」（ルカ10：20）でした。私たちクリスチャンが喜ぶべきことは、神がこんな罪人である私を救ってくださったというこの事実です。あなたの名前が天に書き記されてあること、それを喜びなさいと言うのです。私たちは死んでもよみがえってこの神とともに永遠を過ごすことができる、それを喜びなさいと。

神がくださったその祝福、私たちはそれをしっかりと覚えて、神に心から感謝することです。神によって選ばれた人たち、そのことを私たちは忘れてはならないのです。

2. へりくだること：

私たちはへりくだることを学ばなければいけません。少なくとも、今話したように、私たちが受けるべきこと、私たちが与えられるべきことは、永遠の罪のさばきであり、また、神ののろいでしかない、この事実を覚えるなら、それが私たちから永遠に引き離されたこと、永遠のさばきも神ののろいも私たちにとって全く無縁のものになった、そのことを覚えるだけでも、私たちは神に感謝しなければいけません。神があなたを選んでくださった、そのことを覚えるときに、私たちはこれまでと違う生き方を始めて行くことが出来るのではないですか？願っていることが与えられないと不平をのべることを止めて、願っても与えられない途方もない祝福をいただいていることを感謝する生き方です。

どれ程多くの人たちが幸せを望んでいることでしょうか？でも、主イエス・キリストによって、私たちは本当の幸せを得ました。なぜなら、幸せは神が与えてくれるものだからです。それをいただいた私たち、多くの人たちは永遠のいのちを得たいと思っています。でも、それを与えることができるのは、私たちの罪のために十字架で死んでくださったイエスだけです。私たちはこのイエス・キリストによって罪の赦しをいただいて、永遠のいのちをいただいたのです。私たちはそのことを神に感謝出来るのです。ですから、私たちは自分を人と比較して「あれが欲しい、これが欲しい。」と思っても、でも、もっと大切なことは、どんなに多くの人たちが望んでも、イエス以外によっては得ることのできないこの最高の祝福、それを私たちが得たことを覚えて、そのことを感謝することです。

どんなに大きな祝福をあなたがいただいているのか？永遠のいのちをいただいていること、天に住まいを設けていただいたこと、それは私たちにとってどれ程大きな祝福でしょう！その事実を覚えれば覚えるほど、いったい、私の何を神に誇ろうとしているのか？です。皆さん、何を誇りますか？パウロが言うように、私たちの誇りは、こんな罪人を救いへと導いてくださったイエスにあります。この救いをもたらしてくださったこの偉大なイエスだけです。私たちは人々のところに行って、自分が救われたことを自慢するのではありません。こんな自分を救ってくださった神の前に砕かれて「神さま、感謝します。」と、その様な歩みを私たちが為して行くこと、それこそ、この恵みをいただいた者に相応しい生き方だと思いませんか？

3. 福音を語り続けること：

聖書のどこを見ても、あなたが出て行くときに、彼らを選ばれているか選ばれていないかを判断しなさいというみことばはありません。私たちは出て行って、このすばらしい救い主を語り続けるのです。ここに救いがあることを語り続けるのです。なぜなら、この方こそ私たちの誇りですから、この方によって私たちはこの救いに与ったからです。そのことを私たちはしっかりと語り続けて行くことです。

イエスの恵みによって救われた皆さん、私たちはすばらしい祝福を神からいただきました。想像してください！世界を造る前から神は私のような者を選んでくださったのです。この恵みに対して、一人ひとりが相応しく生きて行くことです。この方に感謝をささげ、この方の前にへりくだって、そして、この方のすばらしさを語り続けて行くことです。そうして、私たちの感謝を表わしましょう。すべては神がしてくださったのです。救いを備え、救いに導き、私たちを救いを楽しむ者としてくださったのです。どうぞ、この神を心から誉め称えながらこの一週間も歩んでください！